

大町市における獣害対策の 取り組みと集落連携

～ニホンザルとの共生を目指して～

 長野県大町市



令和元年までの苦情と疲弊：対策をしても減らない被害



終わりのない苦情対応

毎日多数の苦情に追われ、聞き取り調査すらできない状況。現場職員は強い「もどかしさ」を感じていました。



位置把握の限界

従来のテレメトリーでは正確な位置が掴めず、データの蓄積も不十分。行動予測が立てられない状態でした。



対策への意欲低下

追払だけでは出没を抑えられず、住民の「やる気」も低下。自治会間の連携も困難な状況でした。



令和2年度からのICT導入による構造改革

「諦め」から「前向き」な対策へ。現場の閉塞感を打破した3つの決断。

01



予算措置と増員

新規事業としての予算確保。専門職員の配置と増員により、現場の実行力を大幅に強化しました。

02



ICTツールの導入

GPS発信器や大型捕獲檻を導入。科学的データに基づいた「見える化」と「戦略的捕獲」を開始。

03



司令塔としての役割

職員が対策の司令塔となり、住民説明会を通じて地域を巻き込むプロセスを重視しました。

捕獲の成功が **猟友会・住民のやる気** を劇的に変えた



生態調査の革新：GPSによる「見える化」



2時間ごとの正確な位置把握

サーキットデザイン社製GPSを採用。群れの動きをリアルタイムに近い精度で把握し、追払いの予測精度が飛躍的に向上しました。



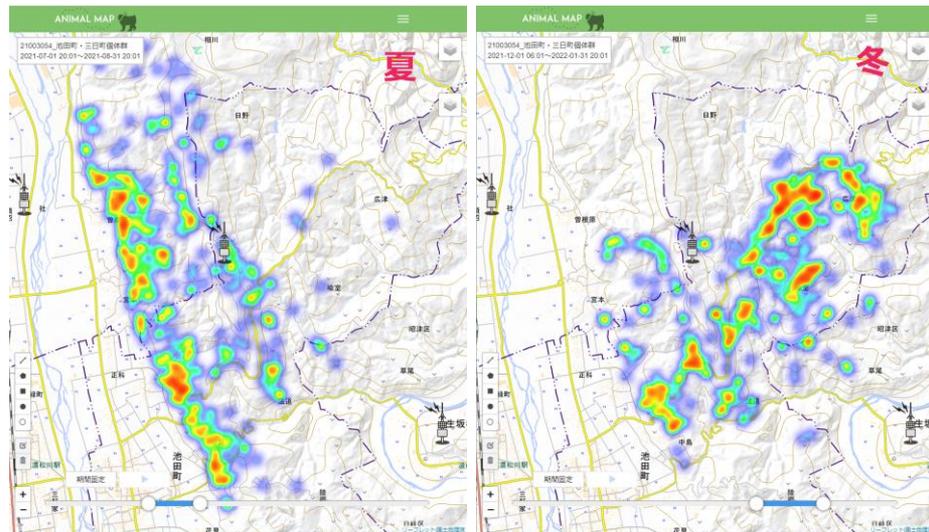
ヒートマップによる行動予測

蓄積されたデータから季節ごとの分布をヒートマップ化。サルの「通り道」や「誘引源」を科学的に特定可能になりました。



住民への「見える化」

地図上での視覚的な共有により、専門知識のない住民もサルの動きを理解。地域全体の防衛意識が高まりました。



データが「勘」を「確信」に変え、戦略的な対策を可能にする。

【GPSデータによる行動パターンの分析例】

対話による情報収集：デジタル×アナログの融合



GPSデータを超えた「現場の生の声」

デジタルデータだけでは見えない、群れの構成や具体的な被害のニュアンスを、パトロール時の聞き取りで補完します。



「被害がない時」こそ対話する

日常的なコミュニケーションが信頼関係を築き、「苦情」を「対策のための貴重な情報」へと質的に変化させます。



住民とのパートナーシップ

職員が顔を合わせることで、住民の「自分たちも協力しよう」という主体的な意識を引き出します。



パトロール時の住民への聞き取り調査

「顔の見える関係が、ICTを活かす土壌を作る。対話こそが、持続可能な対策の基盤です。」

防除と捕獲の戦略：開口部をチャンスに変える

PREVENTION

広域電気柵の管理体制

市内約112kmに及ぶ電気柵を設置。自治会による草刈り・補修と、市によるパトロールの連携で電圧を維持します。



CAPTURE

ICT大型檻による捕獲

「楽おり」「まるみえホカクン」を導入。遠隔監視により、群れの警戒心を解きながら一網打尽にする戦略的捕獲を実施。



市道等のゲート困難な「開口部」を、あえて「捕獲のチャンス」へ転換

「エサ」が繋ぐ地域連携：被害農家との協力



捕獲成功の鍵は「エサの確保」

捕獲には大量の誘引餌が必要です。これを地域資源の活用で解決しました。



農家からのクズリンゴ提供

以前は苦情を言っていた農家が、今では「協力者」としてクズリンゴを自発的に提供



協力と成果の好循環

「提供されたエサで捕獲に成功する」体験が、さらなる協力と被害軽減のサイクルを生んでいます。



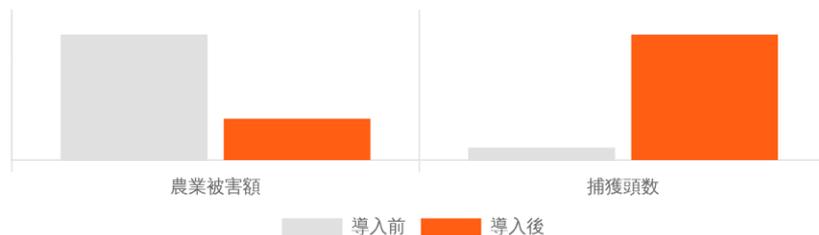
農家から提供された誘引用のクズリンゴ

「苦情」が「情報」と「協力」に変わる瞬間。地域一丸となった餌付け体制の確立。

ICT導入の劇的成果：被害額1/3、捕獲数10倍へ

1/3 農業被害額の減少
(導入前比)

10倍+ 捕獲頭数の増加
(導入前比)



安心して農作物が作れるようになった。助かっています。

— 被害地区の農家

サルの数が減り、追払いがしやすくなった。

— 地域住民

通報件数が激減し、情報共有が前向きに。

— 市役所担当職員

「諦め」の地域に「希望」と「平穏」を取り戻したICTの力

追払い体制の最適化：予測と住民のやる気向上



寝床特定による「待ち伏せ」追払い

GPSで前夜の寝床を特定し、翌朝の出没を予測。住民が先回りして追払うことで侵入を防ぎます。



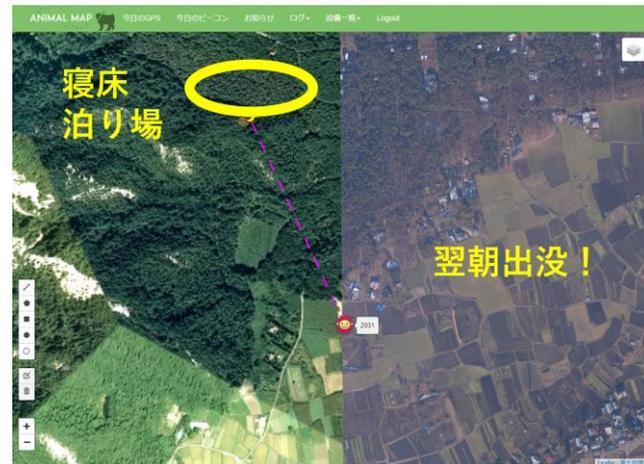
情報の「見える化」と周知

予測情報を説明会や端末で共有。専門家だけでなくサル動きが分かります。



「効いている」実感がやる気を生む

被害が減ることで、住民の意識が「**予防対策への前向きな姿勢**」へと変化しました。



GPSデータを活用した翌朝の出没予測イメージ

効率的な追払いが「群れの加害レベル」を下げ、管理しやすい環境を作る

広域連携：市町村をまたぐ対策の重要性



サルに「行政境界」はない

サルの生息地は市町村をまたいでいます。大田市・池田町・小川村が連携し、群れ全体の動きを把握することが不可欠です。



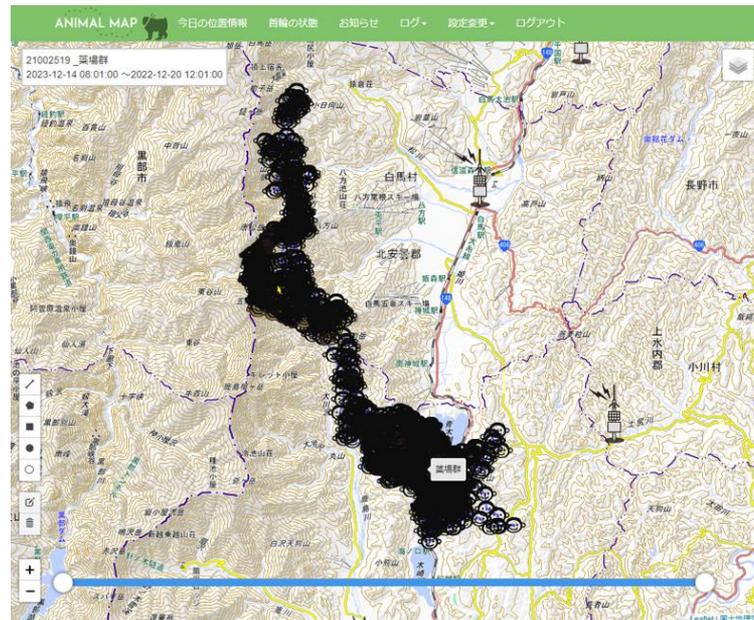
GPS基地局とアカウントの共有

基地局を共通化し、システムアカウントを共有することで、**効率的な情報の収集・共有**を実現しました。



捕獲技術と情報の交換会

定期的な情報交換会を実施。発信器の装着情報や大型檻の貸し出しなど、ハード・ソフト両面で協力しています。



大田市・池田町・小川村の連携体制

「点」の対策を「面」の対策へ。広域連携が、対策の効率を最大化する。

まとめ：成功の鍵は「司令塔」と「巻き込み」

ADMINISTRATION

司令塔としての行政職員

- ✓ 理想的な群れ管理（5～15頭）の徹底
- ✓ ICTデータを活用した戦略立案
- ✓ 現場に足を運び、対話を重視する姿勢

COMMUNITY

住民を主体的に巻き込む

- ✓ 「苦情」を「情報」と「協力」へ転換
- ✓ エサ提供を通じた捕獲への参画
- ✓ 「見える化」による対策の実感と継続

ICTはあくまで手段。そのデータを「対話」と「信頼」に変えることが成功の近道です。

ご清聴ありがとうございました

地域一丸となって次世代へ繋ぐ、
豊かな里山と安心な暮らしを守り抜きます。

📍 長野県大町市

🌐 <https://www.city.omachi.nagano.jp/>

